

Title	Dickinsonの詩における宝石の比喩：9種の宝石に着目して
Author(s)	岡部, 未希
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 31-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88421
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Dickinson の詩における宝石の比喩 —9種の宝石に着目して—

岡部未希

1. はじめに

19世紀のアメリカの詩人、Emily Dickinson (1830–1886) は自然、愛、死、永遠、神といった、故郷ニューイングランドでは伝統的なテーマを用い、生涯に 1785 篇¹の詩を書き上げた。4行4連から6連構成の詩が多いものの、1篇の平均語数は約 54 語であり、比較的短い詩が多い。最も短い詩はたった 7 語で構成されている²ほどである。では、限られた語数で、どのようにして豊かなイメージを膨らませるのか。その際に鍵となるのが、比喩である。

他の詩人同様、Dickinson はユニークな比喩を多種多様に用い、読者を詩の世界に惹きつける。中でも筆者が注目しているのは、宝石や鉱石などの「石」の比喩である。宝石というのは人間が特別に価値を見出した石である。詩の中で何かを喩えるために宝石が使われているのだとすれば、詩人が何に価値を見出しているのか、その価値観の一端を垣間見ることができるだろう。

そこで本稿では、特に 9 種の宝石に着目し、それらの語が Dickinson の詩の中でもつ意味、特に比喩的な意味を分析する。また、宝石の種類による傾向の類似点や相違点にも着目したい。

2. Dickinson の詩における宝石・鉱石

詩の分析に移る前に、宝石や鉱石の定義について確認しておこう。近山 (2007:8) によると、「宝石」とは「真珠など一部有機質のものもあるが、鉱物の中でも美しく、加工して装飾品になる鉱物」のことである。宝石と名のつくものは約 100 種類あるが、宝石と呼ばれるためには次の 3 つの条件を満たす必要がある：(1)色や輝きが美しいこと；(2)硬度が高く、時代を経ても変わらない耐久性を持っていること；(3)産出量が少なく、希少価値があること (ibid. 134)。一方、「鉱石」とは「金や硫黄などの有用な成分を含み、取り出して利益のある鉱物や岩石のこと」(ibid. 8) を指す。Dickinson の詩の中には宝石以外に鉱石も頻出するため、本研究では間口を広げ、鉱石も研究対象に設定している。

以下に示すのは、Dickinson の詩に現れる宝石・鉱石の語の一覧である。語はすべてレマで表記している。つまり、“gold”の語の頻度の中には“gold”, “golds”, “golden”の頻度がすべてまとめられていることになる。含詩とはその見出し語を含む詩の数のことで、この数値よりも語の頻度の方が大きい場合、1 篇の詩に同じ語が複数回使用されている場合がある。一方、1 篇の詩が複数の宝石・鉱石に言及している場合もあるため、留意点として、含詩の数値の合計は宝石・鉱石に言及している Dickinson の詩の合計に等しいわけではない、ということも挙げておく。また、このリストは現時点での暫定版であり、この先更新される可能性についても言及しておきたい。

¹ Johnson, Thomas H. (Ed.) (1960). *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Little Brown and Company, New York. に収録されている詩は、タイトルの代わりに、ほぼ制作年代順に通し番号が割り振られている。番号は 1 から 1775 までだが、そのうち 9 篇には同じ内容で文体が少し異なるバージョンが存在し、それらは同じ番号の ver. 1, ver. 2 …という形で掲載されている (216, 494, 824, 1213, 1282, 1357, 1358, 1366, 1627. 唯一 1366 は ver.3 まで存在する)。そのため、それらの別バージョンも全て各 1 編とみなし、合計 1785 篇と数えている。

尚、本稿ではこの Johnson 版詩集を参照テキストとしている。詩を引用する際は、[通し番号] “詩の 1 行目” という形で表記する。

² [1494] “The competitions of the sky”: The competitions of the sky / Corrodeless ply.

表1 Dickinson の詩に現れる宝石・鉱石

宝石/鉱石	和名	語の頻度	含詩
agate	瑪瑙	1	1
amethyst	アメシスト	6	6
amber	琥珀	22	19
beryl	ベリル(緑柱石)	4	4
chrysolite	カンラン石	2	2
coral	珊瑚	2	2
crystal	水晶	1	1
diamond	ダイヤモンド	14	13
emerald	エメラルド	12	11
garnet	石榴石	3	2
gold	金	57	52
iron	鉄	2	2
lead	鉛	6	6
marble	大理石	7	7
onyx	縞瑪瑙	1	1
opal	オパール	5	4
pearl	真珠	29	27
pyrite	黄鉄鋼	1	1
quartz	石英	2	2
ruby	ルビー	8	8
sapphire	サファイア	4	4
silver	銀	27	27
topaz	トパーズ(黄玉)	3	3

表1から分かるように、Dickinson は詩中で様々な宝石・鉱石の語を用いており、一度に網羅的な説明を行うのは難しい。そこで本稿では、表中で太字になっている9種類の宝石 (amethyst, beryl, chrysolite, diamond, emerald, opal, ruby, sapphire, topaz) に限定して分析を行う。これらを選んだ基準は単純で、比較的有名な宝石で、ある一定頻度詩に出現しており分析しやすい、というものを選んだ³。

これらの宝石が現れる詩を1篇1篇じっくりと読み、詩全体の解釈を行なった上で、各語が文字通りの意味で使われているのか、比喩として使われているのか、という点で2分類した。次の表2は、9種類の宝石がそれぞれ詩の中でどのような意味で使われているかをまとめたものである。数値はそれぞれ語の頻度を示し、文字通り・比喩的な意味で使われている語の頻度の合計は、表1における語の頻度の数値に等しくなっている。

表2 9種類の宝石の詩中での扱い

宝石	文字通りの意味	比喩的な意味
amethyst	0	6
beryl	1	3
chrysolite	1	1
diamond	9	5
emerald	2	10
opal	0	5
ruby	4	4
sapphire	0	4
topaz	1	2

³ あまりメジャーではない chrysolite が含まれているのは、beryl や emerald などの緑系統の宝石と比較を試みたからである。

この分類はどのように行われたのか。たとえば、エメラルドとダイヤモンドが同時に出現する次の2篇⁴、[460] “I know where Wells grow — Droughtless Wells —” と [375] “The Angles of a Landscape —” を比べてみよう。[460]で枯れることのない不思議な井戸は、途中までエメラルドがはめ込まれ、ダイヤモンドが入り混じったギザギザの石壁で出来ている。宝石に言及して何か別のものを指しているわけではなく、この詩の世界の中では実際に井戸の壁に宝石がはめ込まれているのである。以下はこの詩の前半部分である。

I know where Wells grow — Droughtless Wells —
Deep dug — for Summer days —
Where Mosses go no more away —
And Pebble — safely plays —

It's made of Fathoms — and a Belt —
A Belt of jagged Stone —
Inlaid with **Emerald** — half way down —
And **Diamonds** — jumbled on —

一方、[375]では目覚めるたびに窓から見える景色について述べている。以下に示すのは詩の後半部分だが、ここでのエメラルドは外に見える緑色の植物のこと、雪が北極の宝石箱から運んできたダイヤモンドとは白銀の雪景色のことである。語り手の眼に移る景色の中に宝石が浮かんでいるわけではない。これらの語はメタファー（隠喩）、すなわち比喩だと解釈するのが妥当である。本稿では特に、このような宝石の比喩的な意味に着目して分析を進める。

The Seasons — shift — my Picture —
Upon my **Emerald** Bough,
I wake — to find no — **Emeralds** —
Then — **Diamonds** — which the Snow

From Polar Caskets — fetched me —
The Chimney — and the Hill —
And just the Steeple's finger —
These — never stir at all —

3. 9種類の宝石の比喩

Dickinson の使う語彙について網羅的かつ詳細に記述しているエバウエイン（編）（2007:191）は、「宝石」について、「ディキンソンのイメージの種類の中、副次的だが、それでも重要な役割を果たしている」とし、その語の機能について、「価値の高い物質に言及することによって、無形のものに価値を認める大きなイメージのネットワークの一部として、宝石が機能している」と述べている。では宝石で何を暗示するのかというと、具体物や色、抽象的なイメージなど、詩によって様々である。次の表3は、比喩的な意味で使われている宝石の語を、さらにどのような類似性に基づくメタファー（隠喩）かという点で分類しまとめたものである。各行の数値の合計は、表2における比喩的な意味の語の頻度に等しくなっている。

⁴ 詩の引用部における太字は筆者によるもの。以降、特に言及がなければ他の詩の引用においても同様。

表3 9種類の宝石のメタファー

宝石	色と輝き	希少価値	硬さ	宝石のもつイメージ
amethyst	5	0	0	1
beryl	※3	0	※1	0
chrysolite	1	0	0	0
diamond	1	3	1	0
emerald	※10	0	0	※1
opal	4	0	0	0
ruby	3	0	0	1
sapphire	4	0	0	0
topaz	2	0	0	0

表3を見ると、宝石特有の色と輝きの類似性に基づく比喩が多く使われていることが分かる。宝石の希少性や硬質性も2節で宝石の条件として挙げたが、宝石のように珍しいもの・硬いものという表現はDickinsonの詩では少数派だ。また、宝石のもつイメージというのは、恐怖や情熱など、宝石から連想される抽象的な感覚のことで、このような表現も限られた詩の中で見受けられた。尚、表中に※がついた数字がある。これは[737] “The Moon was but a Chin of Gold”のベリルと[1593] “There came a Wind like a Bugle —”のエメラルドが2つの類似性に基づく比喩だと判断し、どちらのカテゴリーにもカウントしているためである。したがって、ベリルとエメラルドは各行の数字の合計が、表2における比喩的な意味の語の頻度プラス1となっている。詳細は後述する。

次節以降、これらのメタファーが詩中でどのように使われているのか、具体例を観察していく。3.1節では希少価値、3.2節では硬さ、3.3節では宝石のもつイメージ、最後に3.4節では最も数の多い色と輝きの類似性に基づく比喩について考察する。

3.1 希少価値の類似性に基づくメタファー

宝石というのはどこでも大量に採れるわけではない。限られた場所で、わずかな量しか採掘できない、その希少性が人々を惹き付ける。Dickinsonの詩の中で希少な宝石の代表例として挙げられているものはダイヤモンドである。

たとえば、[700] “You've seen Balloons set — Haven't You?”では、気球が舞い上がる様子を黄金の海を流れるように離れる白鳥にたとえているのだが、その気球は滅多にない“Duties Diamond”「ダイヤモンドの任務」のために地上にいる「君」を見捨てたのだ、と言う。頭韻[d]が3つ重なり合い (“discarded”, “Duties”, “Diamond”)、より印象的なフレーズとなっている。

You've seen Balloons set — Haven't You?
So stately they ascend —
It is as Swans — discarded You,
For Duties **Diamond** —

Their Liquid Feet go softly out
Upon a Sea of Blonde —
They spurn the Air, as 'twere too mean
For Creatures so renowned —

上記の引用は詩の前半部分で、空へ向かう堂々とした気球の姿が描かれている。ただ、最後には “The Gilded Creature strains — and spins — / Trips frantic in a Tree —” 「その金めっきされた生き物は捻れ、回り、狂ったように木に突っ込んで」しまい、歓声を上げていた人々は “retire with an Oath” 「罵りながら帰って」行く。冒頭でダイヤモンドのように稀で貴重な任務を負っているとされる一方、この詩の最終行で “‘Twas only a Balloon” と貶される気球は、まさに “Glided” 「金色に塗られた」存在なのである。

[397] “When Diamonds are a Legend,”では、インスピレーションを得て詩を作る詩人が、宝飾品を埋めて育てる存在にたとえられている。植物の種を埋めて芽を出したら水をやって育てるように、語り手はブローチやイヤリングを撒く。植物の種にたとえられるダイヤモンドや王冠は詩の素材やアイデアのことであろう。ありふれたものではなく、詩人にとって価値が高いそれらは、成長して“a Legend”「伝説」や“a Tale”「物語」になる。以下はこの詩の第1連である。

When **Diamonds** are a Legend,
And Diadems — a Tale —
I Brooch and Earrings for Myself,
Do sow, and Raise for sale —

また、貴重な物のその価値に気づかなければよかった、と嘆く詩もある。[1108] “A Diamond on the Hand”の前半では、手に入れたダイヤモンドはだんだん慣れて凄さが落ち着いてしまうため、知らないままが一番よかった、と語られる。無論、文字通りダイヤモンドという宝石のことだとも解釈できる。しかし、欲しがっていた時は素晴らしく輝いて見えたのに、手中におさめてしまえば平凡な印象に変わってしまった、そんなものが誰しも1つはあるはずである。たとえば今は部屋の片隅に転がっているおもちゃ、使われなくなった健康器具、昔は王子か姫・今はただの人になった恋人など。ダイヤモンドはそのような比喻だと解釈できる。

A **Diamond** on the Hand
To Custom Common grown
Subsides from its significance
The Gem were best unknown —

このように、希少価値の類似性に基づく比喻の例は9種の中でダイヤモンドだけであった。他の宝石が色と輝きに基づく類似性に基づく比喻に集中する中、そのようなダイヤモンドの比喻は2節で示した[375] “The Angles of a Landscape —”の1例のみである。つまり、Dickinsonにとってダイヤモンドは白銀の色が美しい宝石というよりも、価値の高い宝石の代表例なのだ。宝石にはどんなものがあるか尋ねられたら、おそらくほとんどの人がダイヤモンドを1番に挙げるだろう。現代人も持つ感覚であるため発想としては分かりやすい。

3.2 硬さの類似性に基づくメタファー

ダイヤモンドは宝石の中で最も有名なだけでなく、最も硬い宝石でもある。そのため、価値が高いものだけではなく、硬いものの比喻としても使われる。[753] “My Soul — accused me — And I quailed —”では語り手を非難してきた魂の言葉を、“Tongues of Diamond”「ダイヤモンドの弁舌」と表現している。“Tongues”は舌で舌を使って話す能力を示すメトニミーである。また、“Tongues of Diamond”とはすなわち、ダイヤモンドという素材でできた舌のことではなく、ダイヤモンドのように硬く鋭い弁舌のことを指す。これは硬いという触覚で、人を威圧するような刺々しい話し方、聴覚、を示す共感覚表現だとも言える。語り手はそのような自らの魂の“Disdain”「侮蔑」を聞いて“smiled”「微笑んだ」のだが、それは“A finger of Enamelled Fire”「マニキュアを塗った指の灯火」のように自分を導いてくれるような言葉だと感じ、魂は“My friend”「私の友達」だと確信したからである。

My Soul — accused me — And I quailed —
As Tongues of **Diamond** had reviled
All else accused me — and I smiled —
My Soul — that Morning — was My friend —

Her favor — is the best Disdain
Toward Artifice of Time — or Men —
But Her Disdain — 'twere lighter bear
A finger of Enamelled Fire —

硬さの類似性に基づく比喩はダイヤモンドの他にもう 1 例、ベリルの詩がある。[737] “The Moon was but a Chin of Gold” の前半では月を擬人化しており、金色の顎、ブロンドの前髪、眼、眼は夏の夜露に似ていて、頬は “a Beryl hewn” 「荒削りのベリル」と表現されている。月の表面が、ベリルの一種であるヘリオドールのように黄色いだけでなく、さらに硬くゴツゴツしていることを表すためにこの比喩が使われているのだろう。

The Moon was but a Chin of Gold
A Night or two ago —
And now she turns Her perfect Face
Upon the World below —

Her Forehead is of Amplest Blonde —
Her Cheek — a **Beryl** hewn —
Her Eye unto the Summer Dew
The likest I have known —

宝石のように硬いものという表現は、9 種の宝石が出現する詩のうち上記の 2 篇のみで見つかった。後年に残る硬質性というのは宝石の条件であるが、Dickinson にとってさほど着目すべき特性ではないのかもしれない。

3.3 宝石のもつイメージの類似性に基づくメタファー

宝石から想起されるものは希少価値や硬さだけではない。宝石を見て心に浮かぶ抽象的なイメージの場合もある。[334] “All the letters I can write” では、珍しく美しくかけた手紙について、ビロードのような綴り、フランシスのような文章だと言う。「この手紙」はまだ「君」のもとに届いていないのだろう。だから “Depths of Ruby” 「ルビーのような深い想い」は飲み干されぬまま、言葉は「君」のために秘められたままだ、と言う。ルビーはその濃い赤色から情熱的に燃え上がるような心情のイメージがある。語り手にとって大事な人、手紙の受取手、に対する燃え上がる愛情が、ルビーに喩えられているのである。

All the letters I can write
Are not fair as this —
Syllables of Velvet —
Sentences of Plush,
Depths of **Ruby**, undrained,
Hid, Lip, for Thee —
Play it were a Humming Bird —
And just sipped — me —

[1593] “There came a Wind like a Bugle —” では暴風がやってきた日のことを描いている。以下に示すのはこの詩の前半部分である。人々は “an Emerald Ghost” 「エメラルドの幽霊」を避けるように窓や戸を閉めるのだが、その瞬間、“The Doom's electric Moccasin” 「その不吉な電光の靴」、つまり雷が木々の上を踏みつけるように落ちる。3・4 行目の “Green Chill” 「青白い震え」、 “ominous” 「不気味な」という言葉を合わせると、ここでのエメラルドは闇の中で光る稲妻の緑色を指しているだけだとは考えにくい。エメラルドという宝石から感じられる人智を超えた恐ろしさ、という意味も含まれているだろう。古くから人々は石に秘められた神秘的な力を信じ、天然石や宝石をお守りとして身につけてきた。Dickinson も同様に宝石の不思議な力を感じていたに違いない。

⁵ ベリルは緑や薄青色のものが一般的である。この詩で月の色にベリルが使われていることに関して、 ‘The moon is green cheese.’ という表現があるためでは、と竹森ありささんからご指摘を頂いた。OED Online の moon (n.1.) 検索すると、(P2.) **to believe that the moon is made of green cheese (also cream cheese) and variants: to believe an absurdity. Formerly also †to say that the moon is blue.** という慣用句が載っている。初出例は 1528 年。

There came a Wind like a Bugle —
It quivered through the Grass
And a Green Chill upon the Heat
So ominous did pass
We barred the Windows and the Doors
As from an **Emerald** Ghost —
The Doom's electric Moccasin
That very instant passed —
On a strange Mob of panting Trees

次に示す[245] “I held a Jewel in my fingers —”は読み手によって解釈が分かれる詩である⁶。語り手は穏やかな日にある宝石を握りしめて眠りにつく。なくしはしなないと思っていたが、目覚めるとその宝石はどこかに行ってしまった。語り手に残されたのは“an Amethyst remembrance”「アメシストの思い出」だけだと言う。なくなった宝石がアメシストで、その思い出を指している、というわけではないだろう。これについて、亀井（1998:69）は「紫水晶のように透明感のある硬質の思い出」と宝石の透き通る質感や硬さの比喻だと解釈している。一方、エバウエイン（編）（2007:191）は「永続性を暗示するために宝石を動員している」と説明する。ただ単に宝石の質感を表したいのであればアメシストである必要はなく、エバウエインが述べるように何か抽象的なイメージを想起させるためだと考えるのが自然である。次節で述べるが、Dickinson は夜明けや日没に静謐な美しさを感じ、アメシストで喩えることがある。第 1 連の“warm”「暖かな」、 “prosy”「普通の」という言葉と合わせると、ここでの“an Amethyst remembrance”は在りし日の「穏やかで美しい思い出」を表しているのではないだろうか。

I held a Jewel in my fingers —
And went to sleep —
The day was warm, and winds were prosy —
I said "'Twill keep" —

I woke — and chid my honest fingers,
The Gem was gone —
And now, an **Amethyst** remembrance
Is all I own —

3.1 から 3.3 節まで、9 種類の宝石の希少価値・硬さ・その宝石がもつイメージの類似性に基づくメタファーについて考察してきた。これらの比喻は数が少ないため、各宝石の表現の傾向を断定しにくい。唯一、ダイヤモンドが価値の高い宝石の代表例として捉えられているようだ、ということには分かった。

次の 3.4 節では前に示した表 3 で最も数の多かった、色と輝きの類似性に基づく比喻の例を分析する。

3.4 色と輝きの類似性に基づくメタファー

宝石の条件として色や輝きが美しいことが挙げられるように、各宝石にはそれぞれ固有の色があり、光の下できらきらと輝く。そこで Dickinson の詩では何か美しい色や輝きを表すのに宝石が用いられることがある。

では、まず、何の色と輝きを宝石でたとえているのか。次の表 4 は、そのような宝石のメタファーで喩えられているもの（主意、tenor）の一覧を示している。

⁶ 中島（1973:195）はこの詩は「自分から去っていった愛が主題である」と解釈し、アメシストについて「貴重なものであると同時に生命の比喻でもある」と述べている。終わってしまった恋の大事な思い出が語り手の心の中に息づいているということであろう。実際に大事な宝石を握りしめていたのか、それとも中島（1973）のように宝石を愛の比喻ととるのか、どちらの解釈も成り立つ。

表 4 色と輝きの類似性に基づくメタファーでたとえられるもの

宝石	比喩	主意
amethyst	5	空（夕方（3）、夜明け（2））
beryl	3	植物（2）、月（1）
chrysolite	1	星（1）
diamond	1	雪（1）
emerald	10	植物（8）、鳥（1）、雷（1）
opal	4	空（夕方（2）、嵐の後（1））、家畜（1）
ruby	3	太陽の光（朝）（2）、赤ワイン（1）
sapphire	4	空（昼）（3）、牧草地（1）
topaz	2	太陽の光（夕方）（1）、花（1）

上記の表を見ると、宝石で喩えられるもののほとんどが自然物であることが分かる。人工物、たとえば、ルビーのようなリボンだとか、サファイアのような瞳だとか、そのような例は見受けられなかった。唯一、赤ワインがルビーに喩えられているぐらいである。メタファーを仮に“A is (like) B.”「A は（まるで）B だ」という図式で表すとすれば、A が自然物で B が宝石となる。また、特に空や天体が宝石に喩えられていることにも着目したい。次節以降、具体例を挙げて詳しく見ていきたいと思う。

3.4.1 宝石のような空

本節では宝石で喩えられる空の例を挙げる。どの時間帯の空かよって比喩として用いられる宝石が異なるため、夜明けから順に見ていきたい。

まず、夜明けの空の色に用いられるのはアメシストである。以下は[121]“As Watchers hang upon the East,”の後半第2連の引用だが、ここでは“**Heaven**”「天」を求める願望を、見張り番が東を待ち、乞食たちが空想のご馳走に浮かれ、喉が渇いた人が砂漠で小川のせせらぎを聞くようだ、などと喩える。さらに、見張り番が朝を迎える様子を、“**when the East / Opens the lid of Amethyst**”「アメシストの蓋を開き、朝を解き放つ時」と表現している。朝は暗闇の箱の中に閉じ込められており、アメシストの蓋を開く、すなわち太陽の光でだんだんと闇が紫色を帯びてくると、ようやく朝がやってくる。

As that same watcher, when the East
Opens the lid of **Amethyst**
And lets the morning go —
That Beggar, when an honored Guest,
Those thirsty lips to flagons pressed,
Heaven to us, if true,

おそらく幾人かは、「ここではアメシスト色というだけで、わざわざメタファーだと言わなくても良いのではないか」という疑問をお持ちかと思われる。しかし、“purple”ではなく“**Amethyst**”を使うことで、夜明けの紫色だけでなく、東の見張り番が持ち上げる蓋が宝石のように美しく、硬く、また粗末に扱うべきではない貴重なものだ、というイメージまで喚起されるのである。そう考えると、ただ色を指し示すために宝石を持ち出したとは考えにくい⁷。

また、[318]“I’ll tell you how the Sun rose —”では夜明けの空の様子を“**The Steeples swam in Amethyst** —”「教会の尖塔がアメシストの中を泳いで」と表現している。空を背景に立つ尖塔がアメシスト色の海を泳ぐ魚に喩えられている。

続いて、昼の空の描写にはサファイアが用いられていた。[191]“**The Skies can't keep their secret!**”では天上の人々を“**the Sapphire Fellows**”「サファイアのような青い空の上に住む人々」と呼ぶ。西アフリカ沖合のテネリフ島の火山を引退する騎士に見立て、空の騎士たちに見送られるという[666]“**Ah, Teneriffe!**”では、夕焼けが閲兵する軍隊は“**Sapphire Regiment**”「サファイアのような昼空

⁷ 無論、この詩では[st]の脚韻を踏むという動機づけもあっただろう。

の連隊」と呼ばれる。[291]“How the old Mountains drip with Sunset”は空の変化を描写しているのだが、“With a departing — Sapphire — feature — / As a Duchess passed —”「去っていくサファイアの影を連れて公爵夫人が通り過ぎたように」昼から夕方になると言う。後者 2 篇は他の時間帯の空と合わせて昼の空が歌われているという共通点がある。

闇が深まり夜が近づく夕方の空を表す際、夜明けの空同様アメシストが用いられる。[106]“The Daisy follows soft the Sun —”では、日が沈むにつれ雛菊が太陽に忍び寄るについて、“Enamored of the parting West — / The peace — the flight — the Amethyst —”「平和、飛翔、アメシスト、去りゆく西の空に魅了された」からだと述べる。ここでのアメシストは夕方の煌めく空の色を指す。また、太陽神が 4 頭立ての馬車で東から西に横切することをモチーフにした[1636]“The Sun in reining to the West”では、太陽神の馬車が止まる時は音を立てずに“Whiffletree of Amethyst”「アメシストの横木」をぐるりと回す。また、“menaces of Amethyst”「アメシストの威嚇」によって我々が見ているものの力・価値・美などを夕闇はかえって露わにさせる、と語る詩 ([1609] “Sunset that screens, reveals —”) もある。夕方の空はその光に照らされると脅威を感じるほどの色と光をもっているのだ。

夕方の空の色にオパールが用いられることもある。[15]“The Guest is gold and crimson —”では語り手を含む人々が朝にやってくるかと願う日没の空を擬人化して描写している。“The Guest is gold and crimson —”「その客は黄金色で真紅色」とあるが、これは真っ赤な太陽とそこから伸びた金色の光の束のことであろう。オパールは地色によってホワイト/ブラック/ファイア/ウォーター・オパールの 4 種類に大分類されるのだが、続く“An Opal guest and gray”「オパール色で灰色」とは、太陽の周りの空の色を指し、前行と比較して青系統の色を表すと解釈できる。上着や外套は空が纏う雲のことであろう。

The Guest is gold and crimson —
An **Opal** guest and gray —
Of Ermine is his doublet —
His Capuchin gay —

He reaches town at nightfall —
He stops at every door —
Who looks for him at morning
I pray him too — explore
The Lark's pure territory —
Or the Lapwing's shore!

オパールは「見る方向により赤、青、黄色、乳白色などが混じり合い、虹のように変化する」（近山 2007:158）という特徴がある。この宝石の独特な色を利用したのが[1397]“It sounded as if the Streets were running”である。嵐が通り過ぎ、街は静かになったが、時空が歪んだのではないか人々が“Awe”「畏れ」を感じるほどであった。そして勇気のある人が隠れ家からそっと出てみると、“Nature was in an Opal Apron, / Mixing fresher Air”「自然がオパール色のエプロンをつけて新鮮な空気をかき混ぜていた」。擬人化された自然がオパール色のエプロンをつけているとはすなわち、自然のうち空がオパール色に染まっていたということだが、嵐が去って真っ青に晴れていたのならサファイアを使っても良いはずだ。しかし、ここでのオパールはただ単に青色を指しているわけではなく、様々な色に輝く宝石オパールのように、嵐の後の空も 1 色ではなく多様な色を含んでいたのである。

It sounded as if the Streets were running
And then — the Streets stood still —
Eclipse — was all we could see at the Window
And Awe — was all we could feel.

By and by — the boldest stole out of his Covert
To see if Time was there —
Nature was in an **Opal** Apron,

Mixing fresher Air.

Dickinson はよく庭に出て自然と触れ合っていたという。その庭を覆う広大な空は1日のいつであつても美しく感じられたのであろう。だからこそ、宝石の比喩が多用されているのである。

3.4.2 宝石のような天体

空だけでなく、空に浮かぶ月、星、太陽なども宝石に喩えられる。月をベリルに喩えた詩の例は既に 3.2 節で挙げたが、同じく緑系統でオリーブ色のカンラン石は星を喩えるのに用いられている。それが[24]“There is a morn by men unseen —”である。人には見えない神秘的な5月の朝を歌ったこの詩の第3連では、女官たちが輪になって踊る不思議な光景を、ある夏の夜に星たちが“cups of Chrysolite”「カンラン石のカップ」を揺らし、昼までお祭り騒ぎをするかのようだ、と言う。星がきらきらと光る様子を、擬人化した星がお茶の入ったカップを持ってはしゃぐ様子に喩えている。星や月、雷など、夜空に浮かぶ光が緑がかった色の宝石に喩えられる ([24], [737], [1593]) のは、やはり暗闇の中では黄色ではなく少し薄暗い色に見えるためであろうか⁸。

Ne'er saw I such a wondrous scene —
Ne'er such a ring on such a green —
Nor so serene array —
As if the stars some summer night
Should swing their cups of **Chrysolite** —
And revel till the day —

太陽の光は真っ赤なルビーか、黄色のトパーズに喩えられる。以下は[304] “The Day came slow — till Five o'clock —”の前半第1・2連である。朝5時に急に太陽が現れて明るくなる空の様子を、“Hindered Rubies”「(手の中に) 隠されていたルビー」がこぼれ落ちたかのようだ、と言う。また、第2連では空が紫から黄色になっていく様子を、日の出が揺れ広がり“Breathths of Topaz”「トパーズの光の幅」が夜を押し込むようだった、表現している。どちらも太陽の光を表している点は共通なのだが、ルビーは太陽そのものの色、トパーズは太陽から伸びた光線の色を指しているようだ。

The Day came slow — till Five o'clock —
Then sprang before the Hills
Like Hindered **Rubies** — or the Light
A Sudden Musket — spills —

The Purple could not keep the East —
The Sunrise shook abroad
Like Breathths of **Topaz** — packed a Night —
The Lady just unrolled —

[204]“A slash of Blue —”の後半でも、太陽の色を表すためにルビーが用いられている。Dickinson にとって朝の空とは紫・赤・金色で構成されているもので、その色彩感覚は前に挙げた[304]でも共通している。

little purple — slipped between —
Some **Ruby** Trousers hurried on —
A Wave of Gold —
A Bank of Day —
This just makes out the Morning Sky.

本節では詩の中で宝石に喩えられる天体について考察を行った。月・星・太陽はどれも光を放

⁸ [k]の頭韻 (cups, Chrysolite) や[ait]の脚韻 (night, Chrysolite) を踏むため、という要因も大きい。

ち、人間の目にはきらきらと輝いて見える。それが同じように光に当たって美しく輝く宝石に喩えられる動機づけとなっていると言える。

3.4.3 宝石のような植物

空や天体だけでなく、地上に生茂る美しい植物も Dickinson の詩では宝石に喩えられる。植物といえば青々と輝く葉が印象的なのか、エメラルドやベリルがよく用いられている。例えば、[219] “She sweeps with many-colored Brooms —” では、夕方に地上の景色が移り変わる様子を、“Housewife in the Evening West” 「夕方の西空の主婦」が箒で掃いていく様子に喩えているのだが、その中で “you've littered all the East / With Duds of Emerald!” 「東をエメラルドのボロ布で散らかした」というのは地上で夕陽に輝く木々や草花のことであろう。 [1183] “Step lightly on this narrow spot —” の “the Breast / These Emerald Seams enclose.” 「エメラルドの縫い目が包む胸」も緑豊かな大地の色をエメラルドで表している。エメラルドの縫い目とは木々の途切れ目のことで、その縫い目が囲む胸とは母なる大地のことを指すと思われる。

ある 1 つの植物を喩えるのに宝石が使われる場合もある。[392] “Through the Dark Sod — as Education —” は擬人化された百合の成長を描く。その中で死を恐れることなく喜びを感じながら草の合間に揺れる緑色の蕾を “Beryl Bell” 「ベリルの鐘」と呼んでいる。“Bell” は蕾の形の類似性に基づくメタファーである。

Through the Dark Sod — as Education —
The Lily passes sure —
Feels her white foot — no trepidation —
Her faith — no fear —

Afterward — in the Meadow —
Swinging her **Beryl Bell** —
The Mold-life — all forgotten — now —
In Ecstasy — and Dell —

さらに、 [697] “I could bring You Jewels — had I a mind to —” は、“Never a Fellow matched this Topaz — / And his Emerald Swing —” 「今までこのトパーズにふさわしい人がいなかった — / それから風に揺れるエメラルドに —」 という文で、黄色いハウセンカの花と緑の葉をどちらも宝石を用いて喩えている。

3.4.4 自然物は宝石である

3.4.1 から 3.4.3 節まで、宝石に喩えられる空・天体・植物の例を観察してきた。“A is (like) B.” 「A は (まるで) B だ」という図式において、A が自然物で B が宝石となる例である。面白いことに、Dickinson の詩の中には、A が宝石で B が自然物、つまり「宝石はまるで自然物のようだ」という比喩を用いたものもある。次の詩、[223] “I Came to buy a smile — today —” を見てほしい。

I Came to buy a smile — today —
But just a single smile —
The smallest one upon your face
Will suit me just as well —
The one that no one else would miss
It shone so very small —
I'm pleading at the "counter" — sir —
Could you afford to sell —
I've **Diamonds** — on my fingers —
You know what **Diamonds** are?
I've **Rubies** — like the Evening Blood —
And **Topaz** — like the star!
'Twould be "a Bargain" for a Jew!
Say — may I have it — Sir?

これは語り手が宝石を対価に“Sir”「あなた」の微笑みを買おうとする取引を描いている。対価に支払う宝石は、ダイヤモンド、夕焼けの太陽や血のように赤いルビー、そして星のように黄色く輝くトパーズである。宝石に例えることで自然物の美しさを喩えようとしたこれまでの例とは逆に、美しい自然物に例えることで宝石の価値の高さを示そうとしているのだ。ただ、語り手がどんなに取引を持ちかけても男性から返事が返ってきていないことから、残念ながら取引は失敗に終わってしまうようである⁹。

4. 終わりに

本稿では Dickinson の詩における宝石の比喩について、特に 9 種類の宝石の語に着目して分析を行なった。比喩的な意味で用いられているものは大きく 4 種類のメタファーに分類されることを示し、それぞれ希少価値、硬さ、宝石のもつイメージ、色と輝きの類似性に基づくメタファーを具体例を用いて考察した。その結果、硬さや宝石のもつイメージの類似性に基づくメタファーには例が少なく宝石間の類似点や相違点を見極めることはできなかったが、ダイヤモンドが希少価値の類似性に基づくメタファーにしばしば用いられることが分かった。色と輝きの類似性に基づくメタファーは特に自然物を喩えるのに使われており、宝石固有の色を生かして空や天体、植物などを表していた。さらに、逆に自然物で宝石を喩える詩も存在することも明らかになった。

今後の課題として、まず、その他の宝石が現れる詩の分析を進め、宝石毎、もしくは色の系統毎の傾向をつかみたい。また、質的分析の裏付けとして計量分析を用いることで、主張の補強を試みたい。

参考文献

- エバウエイン, D. ジェイン (編) (2007). 『アメリカ文学ライブラリー4 エミリー・ディキンソン事典』. 鶴野ひろ子(訳). 雄松堂出版.
- フィッシャー, P. J. (1970). 『宝石の科学』. 崎川範行(訳). 共立出版.
- Johnson, T. H. (編) (1960). *The Complete Poems of Emily Dickinson*. Little Brown and Company.
- 亀井俊介 (1998). 『対訳 ディキンソン詩集—アメリカ詩人選(3)』. 岩波書店.
- 中島完 (1973). 『続自然と愛と孤独と』. 国文社, 東京.
- 白水晴雄・青木義和 (1989). 『宝石のはなし』. 技報堂出版.
- 近山晶 (2007). 『鉱物・宝石の不思議』. ナツメ社.

⁹ どんなに価値のある宝石をあげようとも微笑みをくれない相手の男性は誰なのだろうか。この疑問について、絶対に無理な取引を試みる相手なのだから神様ではないか、と岩根久先生と高橋新先生からご指摘を得た。